

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0026
調査タイトル	卒業生の仕事とくらしに関する調査
論文／雑誌名	1「卒業生のライフスタイルと就労」 2「卒業生の仕事とくらしに関する調査－卒業生のくらし」『家政経済学論叢』第 41 号
著者	a 安田三江子 b 浅古照美
掲載ページ	a:pp.3-31. b:pp.33-59.
発行年	2005.05
出版社	日本女子大学家政経済学会

家政経済学論叢 第41号目次

巻頭言

教養教育の意義をあらためて考える	高 木 郁 朗	1
------------------------	---------------	---

論 文

「卒業生のライフスタイルと就労	安 田 三江子	3
「卒業生の仕事とくらしに関する調査—卒業生のくらし—」	浅 古 照 美	33

学生研究

地域通貨のある暮らし

—地域通貨導入の現場から—	吉 川 美 咲	61
---------------------	---------------	----

2004年度生活経済専攻修士論文（目次・概要）	85
-------------------------------	----

2004年度家政経済学科卒業論文（概要）	93
----------------------------	----

会員だより

卒業後37年をふりかえって	川 島 美 保	145
豊かな生活を探して	加 藤 千香子	146
開かれたキャンパスと学生の未来	小 倉 祥 子	147
思いを伝えたい	大 島 直 子	148

その他

2004年度家政経済学科だより	149
卒業生の就職状況	151
日本女子大学家政経済学会会則	154
『家政経済学論叢』編集・投稿規程、「会員だより」投稿規程	156
執筆者紹介	158
編集後記	159

論文

卒業生の仕事と暮らしに関する調査 －卒業生のくらし－

浅 古 照 美

はじめに

1. 地域とのかかわり
2. 趣味や楽しみ
3. 老後について

まとめ

はじめに

本稿では、日本女子大学家政経済学科40周年記念 卒業生の仕事と暮らしに関するアンケート調査の集計を使って、卒業生のくらしについて、「1. 地域とのかかわり」、「2. 趣味と楽しみ」、「3. 老後について」の3項目に焦点を当て分析した。

まず、「1. 地域とのかかわり」では、地域における人間関係、地域活動の種類、生協活動の三側面について、「2. 趣味と楽しみ」では、余暇の種類、既婚の就業継続者との比較の二側面について、また、「3. 老後について」では、当40周年の調査においては、2005年には一回生が還暦を迎える年齢（60歳）になり、実際に介護を経験した方も増えているので、自分の老後のくらしと介護の二側面について分析する。

以上の3項目について回生別、家族構成別、居住地域別、就業形態別、末子年齢別に分けてみていく。またできるかぎり今回の調査結果を20周年、30周年の調査と比較しつつ、各世代の卒業生のくらしについて考え、まとめを行った。

1. 地域とのかかわり

20周年と30周年では、参加している地域活動とその内容を（イ）生協活動（ロ）

PTA活動（ハ）ボランティア活動（ニ）市民活動（ホ）その他の5つに分類している。20、30周年の「奉仕」は、40周年の調査では「ボランティア活動」に、20、30周年の「市民活動」は、40周年では「NPO活動」に変化している。また、現在活動していない人にも、（イ）以前したことがある（ロ）今後したいと思う（ハ）するつもりはない（ニ）その他についてをきいているが、40周年では、現在のかかわりを中心に調査している。

1.1 地域の間人関係

まず、表1-1にあるように、あいさつに関しては、卒業後6年以内の32～37回生の77.2%を除いては、どの回生も、約90%がしている。「子どもを通じた友人がいる」人は、12～16回生（48～44歳）が63.6%、17～21回生（43～39歳）が57.4%と最も多い。次に「危険を知らせあう」や「困ったことを相談しあう」は、22～26回生（38～34歳）以上で多くなっている。「幼なじみがそばにいる」人の平均は8.0%で、12～16回生（48～44歳）以上では減少している。

次に同様のデータを家族構成別にみる。表1-1にあるように、あいさつに関しては、1人で暮らしている人は、58.6%と、平均の90.1%よりずっと少ない。「困ったことを相談する」は、1人で暮らしている人や親と暮らしている人では3.4%、5.2%と、平均の20.2%を大幅に下回っている。また、1人で暮らしている人で、幼なじみがそばにいる人は0人で、地域との接点は非常に少ない。

これらの人々が困ったことを相談するのは、地域の人より友人や別に暮らす家族などが多いのであろうか。

表にはのせていないが、居住地域別では、質問の5項目すべてについて東京や首都圏（千葉・神奈川・埼玉）と比較して、その他の地域の方が高く、予想通り周囲の人との関係がより密接であることが分った。東京や首都圏では居住者の移動が多く、居住状況も高層マンションなどが増え、生活時間が異なる人々が共に暮らしている。

就業形態別では、専業主婦は165人で全体の32.1%を占め、最も多い。質問の5項目の回答割合が、「幼なじみがそばにいる」以外で高いのは、専業主婦と再就職者で、低いのは、転職継続者である。専業主婦と再就職者の多くが子どもを持っており、地域とのつながりを持ち続けてきたといえる。

表1-1 現在の地域の人間関係（複数回答）

	人数	合計%	あいさつをする		子どもを通じた友人がいる		危険を知らせあう		困ったことを相談する		幼なじみがそばにいる	
			人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
合計(%)	514	100.0	463	90.1	206	40.1	132	25.7	104	20.2	41	8.0
回生別												
1～6回生	80	100.0	76	95.0	37	46.3	29	36.3	22	27.5	5	6.3
7～11回生	68	100.0	61	89.7	35	51.5	22	32.4	19	27.9	5	7.4
12～16回生	88	100.0	85	96.6	56	63.6	31	35.2	26	29.5	4	4.5
17～21回生	61	100.0	57	93.4	35	57.4	20	32.8	17	27.9	8	13.1
22～26回生	59	100.0	56	94.9	26	44.1	16	27.1	10	16.9	5	8.5
27～31回生	72	100.0	60	83.3	13	18.1	6	8.3	5	6.9	6	8.3
32～37回生	79	100.0	61	77.2	2	2.6	7	8.9	4	5.1	8	10.1
無回答	7	100.0	7	100.0	2	28.6	1	14.3	1	14.3	0	0.0
家族構成別												
自分	29	100.0	17	58.6	0	0	3	10.3	1	3.4	0	0.0
親と自分	96	100.0	79	82.3	1	1.0	14	14.6	5	5.2	16	16.7
自分と夫	84	100.0	79	94.0	8	9.5	17	20.2	11	13.1	4	4.8
夫と子ども	227	100.0	210	92.5	150	66.1	68	30.0	69	30.4	11	4.8
三世代	60	100.0	60	100.0	38	63.3	23	38.3	13	21.7	6	10.0
夫と親	10	100.0	10	100.0	2	20.0	1	10.0	1	10.0	1	10.0
子どもと自分	6	100.0	6	100.0	5	83.3	5	83.3	3	50.0	2	33.3
無回答	2	100.0	2	100.0	2	100.0	1	50.0	1	50.0	1	50.0
就業形態別												
初職継続	130	100.0	114	87.7	24	18.5	24	18.5	11	8.5	14	10.8
転職継続	88	100.0	72	81.8	10	11.4	10	11.4	4	4.5	9	10.2
専業主婦	165	100.0	154	93.3	101	61.2	55	33.3	54	32.7	9	5.5
再就職	111	100.0	106	95.5	69	62.2	38	35.2	32	28.8	7	6.3
不明	20	100.0	17	85.0	2	10.0	5	25.0	3	15.0	2	20.0
末子の年齢別												
0～2歳	49	100.0	46	93.9	27	55.1	5	10.2	6	12.2	4	8.2
3～6歳	24	100.0	24	100.0	17	70.8	9	37.5	9	37.5	4	16.7
7～12歳	55	100.0	52	94.5	47	85.5	20	36.4	19	34.5	3	5.5
13～15歳	33	100.0	32	97.0	27	81.8	16	48.5	12	36.4	1	3.0
16～18歳	41	100.0	38	92.7	27	65.9	13	31.7	10	24.4	3	7.3
19～22歳	46	100.0	43	93.5	28	60.9	18	39.1	19	41.3	1	2.2
23～27歳	41	100.0	38	92.7	16	39.0	17	41.5	10	24.4	5	12.2
28歳以上	23	100.0	22	95.7	11	47.8	5	21.7	7	30.4	1	4.3
子どものいる人合計	312	100.0	295	94.6	200	64.1	103	33.0	92	29.5	22	7.1
子どものない人合計	202	100.0	168	83.2	6	3.0	29	14.4	12	5.9	19	9.4

(注) ①1～6回生(59～54歳)、②7～11回生(53～49歳)、③12～16回生(48～44歳)、④17～21回生(43～39歳)
 ⑤22～26回生(38～34歳)、⑥27～31回生(33～29歳)、⑦32～37回生(28～23歳)
 ()内の年齢は調査当時

最後に、末子年齢別にみると、子どもがいる人は514人中312人（60.7%）、いない人は202人（39.3%）で、末子年齢の最高は、33歳である。

表1-1に記したように、あいさつに関しては、子どもがいる人の平均が94.6%に対し、子どものいない人は83.2%で、10ポイントほど差がある。「子どもを通

じた友人がいる」人は、末子が3～6歳くらいから増え始め7～12歳でピークに達するが、末子が23歳以上になると、急激に減少する。

「危険を知らせあう」や「困ったことを相談する」は、末子が保育園や幼稚園に入る3～6歳から大きく増加する。この2つの項目を子どもの有無で比較すると、前者では子どもがいる人は、いない人より18.6ポイント高い。後者もまた、子どもがいる人の方が、23.6ポイント高く、地域の人間関係と子どもの有無の関係が非常にはっきり浮かび上がってきた。「幼なじみがそばにいる」人は、子どもがいない人のほうが、2.3ポイント高い。

こうして地域の人間関係を五つの側面からみると、子どもの有無や子どもの年齢によって大きく変化することが分った。

1.2 地域活動の種類

(1) 地域活動の比較

表1-2では、20、30、40周年の現在の地域活動を比較している。

20周年の調査（対象者は、1～16回生 当時38～23歳）において、地域活動を「している」人は28.8%、「していない」人は70.5%であった。30周年の調査（同1～27回生 当時49～23歳）では、地域活動への参加の割合は、「している」と答えた人は41.3%、「していない」人は57.5%と、大きな増加があった。30周年における増加の原因としては、20周年当時20代の人たちが、この10年間に結婚して子どもを持ったことが考えられる。

20周年における地域活動は、年齢と相関関係にみられた。この差は、子どもの有無、子どもの年齢に由来するもののようであった。これは地域活動の内容が、PTA・生協活動が大半を占めることから裏付けられる。奉仕活動、市民活動は、以上の2つに比べて参加者が少なく、職業の有無・子どもの有無・年齢のいずれとも関係なく活動していた。

30周年でも、職業の有無と地域活動の関係を調査しているが、有業者の37%、無業者の47%と、無業者の方が、地域活動に参加する割合が高かった。

また7～15歳の小中学生の子どもを持つ人の場合、地域活動を「していない」人に対する「している」人の割合が高くなっていた。

40周年調査での地域活動への参加は、①生協活動（37.7%）②PTA活動

(11.7%) ③ボランティア活動 (7.0%) ④ 市民活動 (3.3%) ⑤その他 (14.6%) である。その他の内容は、町内会役員 (8.8%)、子育てサークル (4.5%)、民生・児童委員 (1.4%) になる。

表1-2で家政経済学科の卒業生の参加割合を比べると、生協活動は、30周年に比べて、40周年では21ポイント増加し、PTA活動は、4.8ポイント減少した。

生協活動の変化を20、30、40周年で、年代別にみると、30周年の1～6回生を除いては、すべての年代で大きく増加している。

PTA活動は、30周年で最も参加者が多かった7～11回生（当時43～39歳）を40周年の同世代である17～21回生と比較すると、40.6%から29.5%へと減少している。その理由としては、未婚率の上昇や子ども数の減少や仕事に就いている母親の増加の影響などが考えられる。

ボランティア活動は減少しておらず、従来のものでは括れないその他の地域活動が伸びてきており、卒業生の地域活動のあり方も多様化してきている。

地域活動は、数的に増加傾向にあるといえよう。

表1-2 20. 30. 40周年の地域活動の比較

調査	総数(人)	生協活動		PTA活動		ボランティア活動		市民活動		その他	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
20周年(1984年)	573	68	11.9	68	11.9	16	2.8	8	1.4	40	7.0
30周年(1994年)	832	139	16.7	137	16.5	48	5.8	32	3.8	41	4.9
40周年(2004年)	514	194	37.7	60	11.7	36	7.0	17	3.3	75	14.6

(注)

20、30周年の奉仕活動は、40周年では、ボランティア活動としている。

40周年の市民活動の数字は、NPO活動(11人) および環境保護活動(6人)の合計数で、その他は、町内会役員(45人)、子育てサークル(23人)、民政・児童委員(7人)

(2) 現在の地域活動

全体としての地域活動への参加をみたが、次に回生別、家族構成別などに分けて、みていこう。

まず回生別では、表1-3に記したように、一番多いのが、①の生協活動で、年齢が上がるごとに割合が増加しており、すべての回生に幅広く分布している。②のPTA活動は、22～26回生(38～34歳)から増加し始め、7～11回生(53～49歳)を過ぎると低下する。③の町内会役員は、17～21回生(43～39歳)から上昇

したまま下がらない。④のボランティア活動も同様の傾向がみられる。⑤の子育てサークルの参加者は23人で、22～26回生（38～34歳）が最も多い。⑦の民生・児童委員は、計7人で、最も若い人は35歳である。⑧の環境保護は12～16回生（48～44歳）より上に多い。⑨表にはないが保護司はいなかった。

本格的な地域活動は、30代後半から始まっている。

表1-3 現在の地域活動への参加（複数回答）

	人数	合計%	生協		PTA		町内会 役員		ボラン ティア活 動		子育て サークル		NPO		民生・児 童委員		環境保 護	
			人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
回生別																		
1～6	80	100.0	38 (47.5)		5 (6.3)		10 (12.5)		10 (12.5)		3 (3.8)		4 (5.0)		0		2 (2.5)	
7～11	68	100.0	38 (55.9)		8 (11.8)		9 (13.2)		8 (11.8)		2 (2.9)		4 (5.9)		3 (4.4)		2 (2.9)	
12～16	88	100.0	42 (47.7)		20 (22.7)		13 (14.8)		10 (11.4)		4 (4.5)		0		2 (2.3)		2 (2.3)	
17～21	61	100.0	28 (45.9)		18 (29.5)		8 (13.1)		4 (6.6)		4 (6.6)		1 (1.6)		1 (1.6)		0	
22～26	59	100.0	21 (35.6)		9 (15.3)		3 (5.1)		1 (1.7)		6 (10.2)		0		1 (1.7)		0	
27～31	72	100.0	15 (20.8)		0		2 (2.8)		0		3 (4.2)		1 (1.4)		0		0	
32～37	79	100.0	11 (13.9)		0		0		3 (3.8)		1 (1.3)		1 (1.3)		0		0	
無回答	7	100.0	1 (14.3)		0		0		0		0		0		0		0	
就業形態別																		
初職継続	130	100.0	35 (26.9)		6 (4.6)		6 (4.6)		3 (2.3)		3 (2.3)		3 (2.3)		1 (0.8)		1 (0.8)	
転職継続	88	100.0	17 (19.3)		3 (3.4)		3 (3.4)		2 (2.3)		1 (1.1)		0		1 (1.1)		0	
専業主婦	165	100.0	87 (52.7)		27 (16.4)		16 (9.7)		16 (9.7)		14 (8.5)		3 (1.8)		3 (1.8)		4 (2.4)	
再就職	111	100.0	51 (45.9)		23 (20.7)		20 (18.0)		10 (9.0)		4 (3.6)		4 (3.6)		2 (1.8)		1 (0.9)	
不明	20	100.0	4 (20.0)		1 (5.0)		0		5 (25.0)		1 (5.0)		1 (5.0)		0		0	
合計	514	100.0	194 (37.7)		60 (11.7)		45 (8.8)		36 (7.0)		23 (4.5)		11 (2.1)		7 (1.4)		6 (1.2)	

表にはないが、家族構成別にみて、生協とボランティア活動は、どの構成にも共通している。PTA活動は、夫と子ども、三世代世帯に集中している。

こうした中に、親と自分で暮らしている人で、PTAを除く地域活動の全項目に参加している人もいる。このようなタイプの人が増加するかが、単身者の一つのあり方として今後の課題となるであろう。

次に、表にはないが、地域別での生協活動は、東京（28.1%）に比較して、首都圏（40.0%）およびその他の地域（46.4%）の方が参加者が多い。PTAは、全国平均の11.7%に対して、地域的な差はほとんどみられない。子育てサークルは、全体の平均が4.5%と少数だが、首都圏での利用者は3.0%と更に少ない。NPO活動が、首都圏でやや盛んであることを除くと、子育てサークルも、民生・児童委員も、その他の地域の方が参加者が多い。

就業形態別でみると、表1-3にあるように、就業形態と地域活動への参加には顕著な違いがみられる。生協活動は、ここでも全体的に分布しているが、全体平均の37.7%を上回るのは、専業主婦の52.7%と再就職者の45.9%である。PTAでも平均の11.7%を上回るのは、専業主婦の16.4%と再就職者の20.7%で、町内会役員、ボランティア活動、民生・児童委員もこの2者が多くを占めている。

ここで再就職者の活動に注目したい。30周年の調査に比べて、40周年では、再就職者の地域活動参加割合が高いことが分った。

末子年齢別でみると、30周年の調査では、末子年齢が3歳以上になると、地域活動をする人の割合が高くなっていく。表にはのせていないが、40周年でも、子育てサークル以外では、同様の傾向がみられる。その他の活動は、末子年齢が7～12歳以降から活発になる。子どもが小学校に入るようになるとPTA活動が始まり、社会との接点が広がってくる。

子どものいる人といない人を比較すると、すべての項目において、いる人の方が地域活動を行っているといえる。それは、PTA活動が持ち回りであることも含めて、子どもを通して地域にネットワークを持っており、実際に地域の防犯や環境保全の必要性を感じる機会が増えるからであろう。

1.3 生協活動

生協は、代表的な地域活動で、参加割合が増加している。

回生別にみると、17～21回生（43～39歳）以上で、活動が活発になっている。表1-4をみると、共同購入（13.8%）と個別宅配（14.0%）は差が少なく、店舗利用者は15.8%で、1～11回生（59～49歳）に多い。

家族構成からみると、共同購入が多いのは、夫と子ども（19.8%）、三世代世帯（18.3%）であるが、同時に個別宅配の利用者に、夫と子ども（22.5%）、三世代世帯（20.0%）がいる。店舗を多く利用するのは、家族構成が、自分と夫、夫と子どもの人である。1人で暮らしている人も、少数ではあるが、共同購入や店舗利用をしている。

以下は表にはないが、地域別にみると、共同購入が多いのは、その他の地域（18.5%）で、このことからその他の地域では、地域の人とのかかわりがあることが分る。個別宅配は、東京（14.6%）と首都圏（20.6%）で多く、その他の

表1-4 回生別 生協活動

	人数	合計%	共同購入		個別宅配		店舗利用		生協役員	
			人	%	人	%	人	%	人	%
回生別										
1～6回生	80	100.0	12	15.0	12	15.0	18	22.5	0	0
7～11回生	68	100.0	12	17.6	10	14.7	19	27.9	0	0
12～16回生	88	100.0	19	21.6	15	17.0	15	17.0	1	1.1
17～21回生	61	100.0	8	13.1	12	19.7	12	19.7	0	0
22～26回生	59	100.0	13	22.0	10	16.9	5	8.5	1	1.7
27～31回生	72	100.0	5	6.9	9	12.5	6	8.3	1	1.4
32～37回生	79	100.0	2	2.5	4	5.1	6	7.6	0	0
無回答	7	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0
家族構成別										
自分	29	100.0	2	6.9	0	0	1	3.4	1	3.4
親と自分	96	100.0	4	4.2	3	3.1	3	3.1	0	0
自分と夫	84	100.0	6	7.1	5	6.0	16	19.0	0	0
夫と子ども	227	100.0	45	19.8	51	22.5	49	21.6	2	0.9
三世代	60	100.0	11	18.3	12	20.0	9	15.0	0	0
夫と親	10	100.0	1	10.0	1	10.0	0	0	0	0
子どもと自分	6	100.0	1	16.7	0	0	1	16.7	0	0
無回答	2	100.0	1	50.0	0	0	2	100.0	0	0
合計(%)	514	100.0	71	13.8	72	14.0	81	15.8	3	0.6

地域は7.7%と低い。店舗利用が多いのは、首都圏（16.4%）、その他の地域（23.8%）になる。

就業形態別では、共同購入、個別宅配、店舗利用のどの項目でも、専業主婦と再就職者が高い割合を占め、関心の高さがうかがえる。

最後に末子年齢別にみると、末子年齢が0～2歳、3～6歳までは、個別宅配の利用者が32.7%、37.5%と多いが、末子が小学生の7～12歳になると、共同購入が増加する。しかし、子どもが22歳を過ぎると、利用者は急に減る。子どもの就職などにより、家での食事の回数が減ったり、家族構成員の減少なども考えられる。その分、店舗の利用が増えるが、店舗数はそれほど多くはない。

30周年の調査が行われた1994年と2003年を、日本生活協同組合『2003年度生協経営統計』で比較してみると、①生協数は、652から558に減少した。②組合員数は、1,801万人から2,211万人に増加したが、前年度比、102.5%（53万人増）である。③班数は142.7万から177.4万に増加しているが、班組組合員数は、759万人から616万人へ減少しており、班組織率も42.1%から27.8%に低下した。④1人当り購買月利用高は、16,532円から13,458円へ減少している。⑤店舗数は、

1,554から1,205に減少している。

20、30周年と比較して40周年で生協活動が大きく増加した理由は、卒業生の年齢が上がったこと、食の安全や環境問題に配慮するようになったこと、生協の販売システムなどが考えられる。最後に生協の役員は、3名と少ない。

2. 趣味や楽しみ

趣味や楽しみに該当するものとして、20周年の調査では、「習い事」、30周年の調査では、「生涯活動」という言葉が用いられている。表2-1は、回生別にみた20の趣味の多い順の分布である。また、当調査で選択された趣味の数は、平均1人3.5になる。

当調査における卒業生の趣味や楽しみのベスト5は、①旅行 ②ショッピング ③映画・演劇鑑賞 ④食べ歩き ⑤音楽鑑賞である。「その他」の項目に関しては、後で述べる。60の自由記入があった。以下では、趣味や楽しみをジャンル別に分けて、卒業生の動向をみる。

表2-1 回生別 趣味や楽しみ（複数回答）

回生	人数	旅行	ショッピング	映画・演劇鑑賞	食べ歩き	音楽鑑賞	料理	街歩き	ペットを飼う	ガーデニング	語学
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
1～6	80	66.3	31.3	31.3	28.8	28.8	16.3	22.5	13.8	26.3	16.3
7～11	68	42.6	17.6	29.4	25.0	25.0	19.1	7.4	38.2	25.0	19.1
12～16	88	26.1	19.3	35.2	26.1	27.3	17.0	14.8	15.9	13.6	10.2
17～21	61	55.7	32.8	26.2	32.8	14.8	14.8	11.5	8.2	11.5	14.8
22～26	59	45.8	33.9	25.4	25.4	16.9	25.4	16.9	10.2	15.3	10.2
27～31	72	69.4	36.1	30.6	31.9	26.4	20.8	19.4	11.1	8.3	11.1
32～37	79	58.2	51.9	40.5	30.4	34.2	29.1	31.6	13.9	1.3	10.1
無回答	7	57.1	28.6	14.3	14.3	28.6	28.6	28.6	0.0	0.0	14.3
合計	514	51.8	31.7	31.5	28.4	25.5	20.4	18.3	15.8	14.2	13.0

回生	人数	楽器の演奏	テニス	水泳	茶道	ゴルフ	華道	ハイキング	書道	陶芸	その他
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
1～6	80	6.3	5.0	16.3	7.5	6.3	8.8	15.0	7.5	1.3	61.3
7～11	68	16.2	13.2	8.8	11.8	4.4	7.4	8.8	8.8	1.5	60.3
12～16	88	14.8	14.8	11.4	0.0	4.5	5.7	4.5	8.0	1.1	68.2
17～21	61	16.4	13.1	6.6	11.5	6.6	4.9	4.9	4.9	0.0	83.6
22～26	59	10.2	11.9	10.2	11.9	8.5	8.5	1.7	3.4	1.7	69.5
27～31	72	6.9	9.7	11.1	6.9	11.1	8.3	2.8	2.8	1.4	70.8
32～37	79	13.9	15.2	15.2	6.3	8.9	1.3	3.8	3.8	1.3	77.2
無回答	7	42.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0	0.0	14.3
合計	514	12.5	11.7	11.5	7.4	7.0	6.2	6.2	5.6	1.2	30.0

2.1 ジャンル別趣味や楽しみ

(A) 文化・創作（複数回答）

料理	105人（20.4%）	華道	32人（6.2%）
語学	67人（13.0%）	書道	29人（5.6%）
楽器の演奏	64人（12.5%）	陶芸	6人（1.2%）
茶道	38人（7.4%）		

料理は、20代の32～37回生（29.1%）が最も多く、1人で暮らしている人（27.6%）や、初職継続者（30.0%）の割合が高い。子どもがいる人では、末子年齢が0～6歳の人と、23歳以上の人が多い。

語学は、20周年で5%、30周年では22.4%であったが、40周年では13.0%に減少した。50代の専業主婦が多い。

楽器の演奏はどの回生にも好まれているが、末子年齢が3～15歳の人に多い。

20周年のアンケート結果と比較すると、茶道・華道が全体に占める割合は20周年の約30%に対し、30周年では13.3%と、半分以下に減った。40周年では、茶道が7.4%、華道が6.2%と、更に半分以下に低下した。昔は茶道・華道が花嫁修業の主流であったが、今は趣味の一つとなった。

(B) 日常の楽しみ（複数回答）

映画・演劇鑑賞	162人（31.5%）	ペットを飼う	81人（15.8%）
音楽鑑賞	131人（25.5%）	ガーデニング	73人（14.2%）

映画・演劇鑑賞や音楽鑑賞はどの回生にも人気があるが、最も多いのは、20代の32～37回生で、家族構成では、親と自分で暮している人の割合が高い。

ペットを飼う人は、7～11回生（53～49歳）が38.2%と最も高い。家族構成では、夫と子どもや三世代世帯と共に、親と自分で暮らしている人も多い。子どもがいる人では、末子が13～27歳までに飼う人が多くみられる。子どもが希望して飼いはじめることも多い。

ガーデニングは、家族構成が「自分」や「親と自分」以外の全部に人気がある。また、末子年齢が、19～22歳以上の専業主婦に愛好者が増える。子どもの手が離れ、まとまった時間とスペースがとれるようになる頃から関心を持つ人が多い。

(C) スポーツ（複数回答）

テニス	60人（11.7%）	ゴルフ	36人（7.0%）
水 泳	59人（11.5%）	ハイキング	32人（6.2%）

テニスは、7～11回生（53～49歳）より若い回生に多く愛好されている。三世代世帯では他より少なく、初職継続者と専業主婦に多い。

ハイキングは、1～6回生に多く、1人で暮らしている人はいない。子育てが一段落し、末子年齢が22歳以降が最も多い。友人や仲間と参加する傾向がみられる。

(D) 観光・娯楽（複数回答）

旅行	266人（51.8%）	食べ歩き	146人（28.4%）
ショッピング	163人（31.7%）	街歩き	94人（18.3%）

旅行はどの回生にも人気があるが、12～16回生（48～43歳）では低い。また家族構成では、家族が多いと出かけにくいいためか、夫と子どもや三世代世帯では低い。就業形態では、専業主婦や再就職者より、初職継続者や転職継続者に回答者が多い。末子年齢が23歳以上になると、64.0%に急上昇する。

ショッピングは、20代の32～37回生が51.9%と最も高く、家族構成では、自分（37.9%）や親と自分（53.1）で高く、初職継続者に多い。また、子どもがいる人では、末子年齢が28歳以上になると47.8%に、急増する。

食べ歩きは、どの回生にも人気がある。家族構成では、自分（34.5%）、親と自分（35.4%）が多く、三世代世帯では低い（16.7%）。

街歩きは、20代の32～37回生、家族構成では、親と自分や自分と夫の人に多い。末子年齢が28歳以上になると、34.8%と急増する。

このジャンルの共通点は、20代の独身者や50代後半になって、時間と経済的なゆとりができた世代の参加が多いことである。

(E) その他

「その他」は、154人（30.0%）で、代表的なものは以下のようになる。

（文化）

読書、エッセイ、短歌、パッチワーク、絵手紙、ジュエリーメイクなど

(スポーツ)

スポーツ観戦、ジョギング、バドミントン、ダンス、スキー、ヨガなど

(F) 自由記入

60の自由記入の中から、代表的なものを4つ選んだ。

- ・子どもができてからは、仕事と家事・育児で余暇時間がない。子どもの手が離れたら（大学へ行ったら）習い事を始めたい。
- ・介護のため、好きなコースへ行けなくなった。
- ・趣味を生かし、ボランティア活動（手話、歴史案内ガイド、フルートの演奏）をしている。
- ・趣味と実益をかねて、夫と野菜栽培をしている。

2.2 既婚の就業継続者との比較

514人の回答者の中で、既婚の就業継続者は、70人であった。

表2-2をみると、既婚の就業継続者の割合の方が高い趣味は、料理、ガーデニング、楽器の演奏、テニス、水泳、茶道、ゴルフ、ハイキング、書道である。この中に、全体からみた卒業生の趣味や楽しみのベスト5は、1つも入っていない。仕事と家事や子育てなどで、まとまった余暇時間が取りにくいことが大きな原因であろう。

表2-2 既婚の就業継続者との比較（複数回答）

	人数	旅行	ショッピング	映画・演劇鑑賞	食歩歩き	音楽鑑賞	料理	街歩き	ペットを飼う	ガーデニング	語学
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
既婚の就業継続者	70	47.1	25.7	25.7	21.4	24.3	32.9	11.4	14.3	15.7	7.1
その他の人	444	52.5	32.7	32.4	29.5	25.7	18.5	19.4	16.0	14.0	14.0
合計	514	51.8	31.7	31.5	28.4	25.5	20.4	18.3	15.8	14.2	13.0

	人数	楽器の演奏	テニス	水泳	茶道	ゴルフ	華道	ハイキング	書道	陶芸	その他
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
既婚の就業継続者	70	20.0	15.7	14.3	8.6	4.3	11.4	8.6	0.0	14.3	
その他の人	444	11.3	11.0	11.0	7.2	6.8	6.5	5.4	5.2	1.4	32.4
合計	514	12.5	11.7	11.5	7.4	7.0	6.2	6.2	5.6	1.2	30.0

週休2日制が定着し、働いていても連休がとりやすくなり、旅行や芸術鑑賞やグルメに多くの人が楽しみを見出しているようである。また、ガーデニングやペ

ットの飼育など、身近なところでの動植物への愛情は心を癒し、最近ブームとなっている。それに続くスポーツには、健康への関心がみられる。

回答をよせてくれた卒業生の趣味や余暇の過ごし方は多様で、心豊かに人生を過ごしている様子が伝わってきた。

3. 老後について

厚生労働省の「平成15年簡易生命表」によれば、平成15（2003）年の日本人の平均寿命は、女性が85.33歳、男性が78.36歳で、女性は、昭和60（1985）年から連続世界1位となっている。男性は平成15年度では、アイスランド、香港に次いで世界3位である。

30周年では、主に高齢者の介護について質問しているが、40周年では、卒業生の平均年齢が高まったこともあり、もう少し質問の枠を広げてみた。

3.1 老後の過ごし方

(1) 希望する老後の生活

表3-1によれば、年齢が高くなるほど、一人で在宅を希望する人が増え、20代の32～37回生の12.7%に対し、1～6回生では56.3%となる。それとは対称的に家族と暮すことを希望する人は、20代の32～37回生では64.6%だが、徐々に減少し、1～6回生では28.8%に低下する。有料老人ホームを希望する1～6回生は23.8%で、その割合は家族と暮らすことを希望する人よりやや低い。コーポラティブハウスなどを選択する人は平均11.3%、きょうだいとの生活を考える人は、平均2.9%と低い。

表にはないが、家族構成別にみると、どの構成をみても家族と暮らしたい人が一番多く、1人で暮らしている人では51.7%、親と自分の人では45.8%、と特に高い。自分と夫や、夫と子どもや、三世代世帯で暮らしている人は、家族と暮らすことを選ぶと同時に一人で在宅や有料老人ホームも選んでいる。一人で在宅を希望する人の割合は、夫と子どもで暮らしている人が36.6%とやや高いが、どの家族構成でも30%前後で、興味深い。希望する老後の過ごし方は、現在の家族構成の違いよりも、個人の好みと状況によるのではないだろうか。

表3-1 回生別希望する老後の生活（複数回答）

回生	人数	一人で 在宅	家族と 暮らす	きょうだいと 暮らす	有料老人 ホーム	コーポラ イブハウス など
		人 %	人 %	人 %	人 %	人 %
1～6	80	45 (56.3)	23 (28.8)	1 (1.3)	19 (23.8)	13 (16.3)
7～11	68	28 (41.2)	16 (23.5)	2 (2.9)	21 (30.9)	11 (16.2)
12～16	88	37 (42.0)	36 (40.9)	2 (2.3)	16 (18.2)	3 (3.4)
17～21	61	18 (29.5)	26 (42.6)	1 (1.6)	11 (18.0)	4 (6.6)
22～26	59	11 (18.6)	26 (44.1)	3 (5.1)	13 (22.0)	9 (15.3)
27～31	72	13 (18.1)	38 (52.8)	1 (1.4)	12 (16.7)	9 (12.5)
32～37	79	10 (12.7)	51 (64.6)	5 (6.3)	5 (6.3)	8 (10.1)
無回答	7	3 (42.9)	2 (28.6)		2 (28.6)	1 (14.3)
合計	514	165 (32.1)	218 (42.4)	15 (2.9)	99 (19.3)	58 (11.3)

(2) 希望する老後の活動や過ごし方

老後になると介護が重要になるが、それと同時に高齢者が元気に活動する場も必要になる。高齢期の過ごし方で大切に思っていることの1位は、表3-2にあるように、どの回生も趣味の充実で、平均で62.3%と高い。年をとっても仕事をしたい人は、平均9.9%で、1～6回生では5.0%と低い。その下の回生からは、増加している。「友人との交流を深める」と「旅行をたくさんする」は、共に48%で、次に多いのが、社会参加（21.0%）と地域での活動（18.5%）になる。若い世代では、海外に住むことを考える人もいるが、1～6回生では、1.3%と、少ない。地方や出身地への居住を考える人も少なく、現在の地域で生きることを考える人が多い。

家政経済学科の卒業生には未だ高齢者はいないが、今後の高齢期の過ごし方は多様化することが考えられる。

表3-2 回生別 希望する老後の活動や過ごし方（複数回答）

回生	人数	趣味を充実 させる	年をとっても 仕事をする	友人との 交流を深 める	旅行をたく さんする	社会参加 をする	地域で活 動する	海外に住 む	地方に住 む	出身地 に帰る	その他
		人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %
1～6	80	45 (56.3)	4 (5.0)	40 (50.0)	40 (50.0)	20 (25.0)	11 (13.8)	1 (1.3)	3 (3.8)	1 (1.3)	2 (2.5)
7～11	68	45 (66.2)	10 (14.7)	38 (55.9)	29 (42.6)	18 (26.5)	15 (22.1)	7 (10.3)	1 (1.5)	2 (2.9)	1 (1.5)
12～16	88	54 (61.4)	8 (9.1)	49 (55.7)	30 (34.1)	20 (22.7)	18 (20.5)	4 (4.5)	6 (6.8)	5 (5.7)	2 (2.3)
17～21	61	36 (59.0)	5 (8.2)	27 (44.3)	31 (50.8)	14 (23.0)	17 (27.9)	7 (11.5)	1 (1.6)		0
22～26	59	40 (67.8)	10 (16.9)	22 (37.3)	26 (44.1)	11 (18.6)	7 (11.9)	7 (11.9)	2 (3.4)	2 (3.4)	3 (5.1)
27～31	72	46 (63.9)	6 (8.3)	32 (44.4)	46 (63.9)	7 (9.7)	13 (18.1)	9 (12.5)	4 (5.6)	4 (5.6)	1 (1.4)
32～37	79	50 (63.3)	6 (7.6)	40 (50.6)	47 (59.5)	18 (22.8)	14 (17.7)	12 (15.2)	4 (5.1)	3 (3.8)	2 (2.5)
無回答	7	4 (57.1)	2 (28.6)	3 (42.9)	2 (28.6)		0	1 (14.3)	1 (14.3)		0
合計	514	320 (62.3)	51 (9.9)	251 (48.8)	251 (48.1)	108 (21.0)	95 (18.5)	48 (9.3)	22 (4.3)	17 (3.3)	11 (2.1)

3.2 老後の不安

病気は避け難いことであり、高齢期の孤独は深刻である。そして当調査では、家族や子どもとの関係よりも、年金や社会的な介護サービスの質と量に対する不安を持っている人の方がはるかに多いことが分った。

表3-3で回生別にみると、年金への不安は、27～31回生（33～29歳）が79.2%と最も高いが、どの世代も半数以上の人が不安を感じている。同様に、回生が上がるごとに社会的な介護サービスの質と量への不安が上昇し、1～6回生では、65.0%に達する。

家族との関係や子どもとの関係に不安を抱く人の割合は、平均20%台で、はるかに少ない。

平成15年度の内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」では、20代から50代の男女4,000人と60代以上の男女2,000人を対象に調査を行った。その中で、老後に不安を感じることをたずねている。第1位は、年金・介護・医療など社会保険給付の減少（76.2%）、第2位は、自分の健康（72.7%）、第3位は税金や社会保険料負担の増加（47.4%）であった。

家族が高齢者の介護や、精神的な支えにはなるとしても、家族がいない人やいても介護ができない人もいるので、年金・介護・医療など、公的な施策の充実は不可欠である。

表3-3 回生別老後についての不安な点（複数回答）

回生	人数	年金		社会的な介護サービスの質と量		病気		自分自身の孤独		家族との関係		子どもとの関係		友人との関係		地域とのかかわり		その他	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1～6	80	40 (50.0)		52 (65.0)		71 (88.8)		30 (37.5)		17 (21.3)		21 (26.3)		7 (8.8)		8 (10.0)		2 (2.5)	
7～11	68	37 (54.4)		34 (50.0)		49 (72.1)		24 (35.3)		14 (20.6)		12 (17.6)		3 (4.4)		5 (7.4)		3 (4.4)	
12～16	88	60 (68.2)		55 (62.5)		75 (85.2)		29 (33.0)		22 (25.0)		21 (23.9)		5 (5.7)		8 (9.1)		3 (3.4)	
17～21	61	33 (54.1)		37 (60.7)		54 (88.5)		16 (26.2)		14 (23.0)		15 (24.6)		4 (6.6)		4 (6.6)		0	
22～26	59	39 (66.1)		24 (40.7)		51 (86.4)		23 (39.0)		14 (23.7)		14 (23.7)		5 (8.5)		5 (8.5)		0	
27～31	72	57 (79.2)		32 (44.4)		63 (87.5)		35 (48.6)		18 (25.0)		16 (22.2)		7 (9.7)		4 (5.6)		1 (1.4)	
32～37	79	48 (60.8)		25 (31.6)		58 (73.4)		42 (53.2)		19 (24.1)		14 (17.7)		5 (6.3)		2 (2.5)		2 (2.5)	
無回答	7	5 (71.4)		1 (14.3)		5 (14.3)		2 (28.6)		1 (14.3)		2 (28.6)		1 (14.3)		1 (14.3)		1 (14.3)	
合計	514	319 (62.1)		260 (50.6)		426 (82.9)		201 (39.1)		119 (23.2)		115 (22.4)		37 (7.2)		37 (7.2)		12 (2.3)	

3.3 介護

(1) 必要とする介護サービス

自分が必要な時に積極的に利用を考えるサービスに対する回答（回答者は514人で複数回答）は、①ホームヘルプサービス329人（64.0％）②デイサービス266人（51.8％）③ショートステイ177人（34.4％）④配食サービス261人（50.8％）で、ボランティアの活用は114人（22.2％）と、これらよりは少ない。介護が必要になった時、在宅で、社会資源を利用しながらの暮らしを望んでいる人が多い。一方、有料老人ホームへの入所を希望している人は202人（39.3％）と、特別養護老人ホームの101人（19.6％）を大きく上回っている。

(2) 介護の状況

30周年の調査では、卒業生のうち最年長である1回生の年齢が50歳弱であったため、高齢者介護の経験者は832人中70人（8.4％）、現在継続中の人は33人（4.0％）であった。

40周年調査では、介護経験者は、514人中76人（14.8％）、現在継続中の人は39人（7.6％）に増加した。

表3-4 回生別介護経験の有無

回生	人数	過去経験		現在継続		ない		無回答	
		人	%	人	%	人	%	人	%
1～6	80	34	42.5	13	16.3	32	40.0	1	1.3
7～11	68	11	16.2	12	17.6	42	61.8	3	4.4
12～16	88	16	18.2	7	8.0	59	67.0	6	6.8
17～21	61	9	14.8	4	6.6	47	77.0	1	1.6
22～26	59	3	5.1	0	0.0	55	93.2	1	1.7
27～31	72	1	1.4	0	0.0	69	95.8	2	2.8
32～37	79	1	1.3	1	1.3	76	96.2	1	1.3
無回答	7	1	14.3	2	28.6	4	57.1	0	0.0
合計	514	76	14.8	39	7.6	384	74.7	15	2.9

表3-4にあるように、過去の5人と現在の1人以外は、17～21回生（43～39歳）以上の人が介護を経験している。過去の介護者が最も多いのは1～6回生で、半数に近い34人、家族構成別では、夫と子どもの43人（18.9％）である。

現在の介護継続者が最も多いのは、1～6回生の13人と7～11回生の12人で、全

体の約3分の2を占める。家族構成別では、人数は夫と子どもで暮らしている人が18人（7.9%）と多いが、割合では三世帯世帯が13人（21.6%）と高い。

次に、表3-5で、自分の親や配偶者の親に介護が必要になった場合の事をまとめた（介護経験のある人は、実際の状況から、経験のない人は、予想や考えをあえて1つにしぼり記入してもらった。）。

以上のデータから、自分の親の介護には配偶者の親と比較して、自らが身近で在宅介護をする傾向が見られる。伝統的な、嫁が介護をするという考えは徐々に薄れつつあるといえよう。

表3-5 自分の親と配偶者の親の介護

	自分の親		配偶者の親	
	人	%	人	%
同居して自分のみが介護	15	2.9	11	2.1
同居して介護サービスを利用	122	23.7	102	19.8
近居して介護サービスを利用	160	31.1	127	24.7
きょうだい、配偶者がメイン	119	23.2	138	26.8
入所施設やサービスを利用	54	10.5	72	14.0
無回答	44	8.6	64	12.5
合計	514	100.0	514	100.0

(3) 介護の対象者

介護の対象者について、30周年と同様に、当調査でも複数の経験がある人にもすべて回答してもらった。30周年の介護経験者は、自分の父親の次に相手の両親を介護した人が多く、その他の人を介護した割合も43.3%と高かった。

30周年の介護継続者は、その他の人の割合が14.3%に減り、自分たちの親の代の面倒をみる人が6割をこえた。

一方、40周年の介護経験者は、図3-1にあるように配偶者の両親（40人）に比べて自分の両親（52人）を介護した人の方がやや多く、その他の人を介護した人は11人（10.4%）に減った。

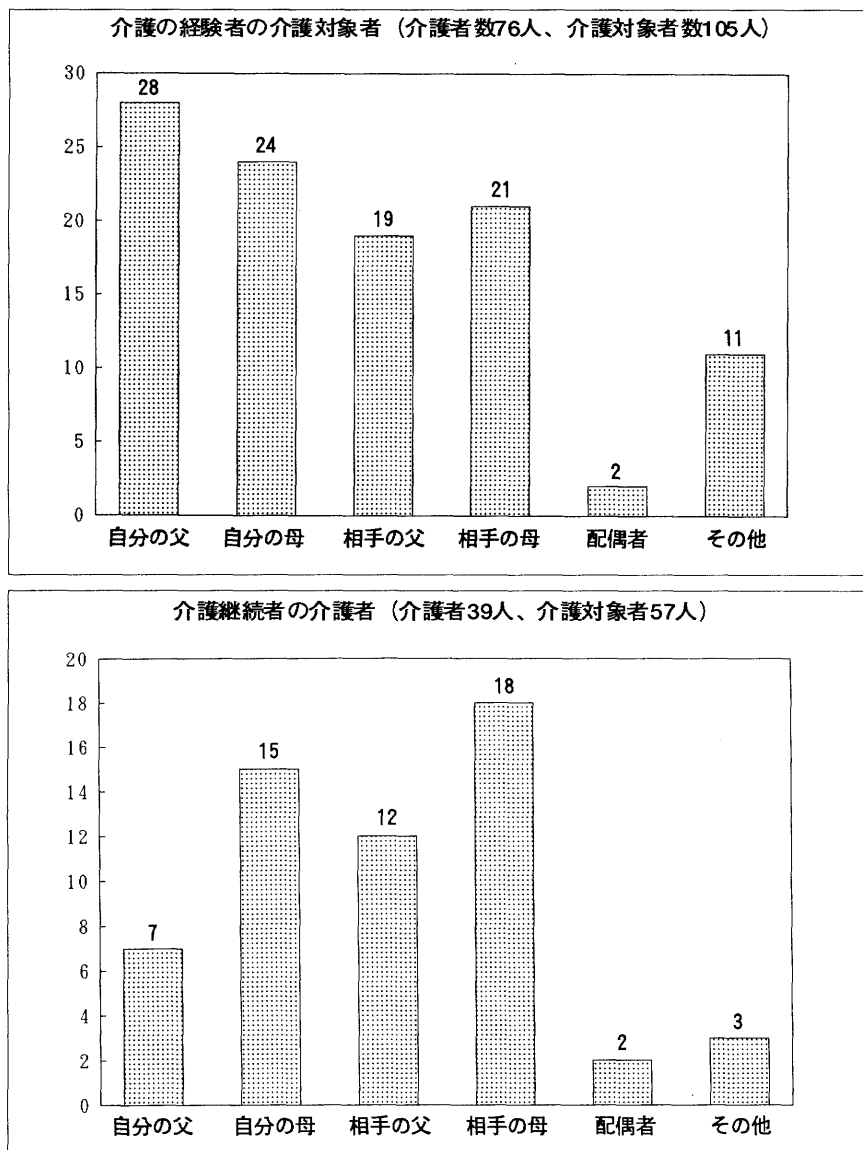
40周年の介護継続者は39人で、双方の母親を介護している人が多い。これは、女性の平均寿命が高いことにも関連していると思われる。

また、配偶者を介護した人は過去に2人、現在2人となっている。

介護者1人が現在受け持つ要介護者は、30周年には1.27人、40周年では1.46人

に上昇し、負担が増加している。

図3-1 介護経験者と介護継続者の比較（複数回答）



(4) 利用したサービス

次に、介護経験がある人に、利用したサービスをすべて答えてもらった。

30周年と比較する上で最も大きな違いは、1994年の新ゴールドプランに加えて、2000年4月に介護保険制度が実施されたことである。30周年の介護経験者の介護の場所については「自宅で」が41.7%、「自宅外で」が、33.9%、「自宅内外両方」が11.3%となっていた。「自宅外で」のうち、多くの人が実家や病院と答えており、福祉施設を挙げる人はほとんどいなかった。また30周年の介護継続者では、継続中に介護の外部化が徐々に進み、「自宅外で」の割合が45.4%と、約11ポイント上昇してきた。

40周年の調査では、表3-6のように、介護経験がある人と現在継続している人に利用したサービスを答えてもらった。介護経験者が利用したサービスは、平均1.41で、継続者が利用しているサービスは2.13と増加している。

高齢者の介護は急速に変化し、外部化が進み、介護サービスの利用者が増えた。

表3-6 介護時に利用したサービス（複数回答）

介護時に利用したサービス	介護経験者が利用		介護継続者が利用	
	人	%	人	%
訪問介護	25	23.4%	22	26.5%
デイサービス	16	15.0%	19	22.9%
ショートステイ	6	5.6%	12	14.5%
長期療養型病床群	19	17.8%	8	9.6%
老人保健施設	8	7.5%	4	4.8%
在宅介護支援センター	2	1.9%	3	3.6%
特別養護老人ホーム	8	7.5%	6	7.2%
有料老人ホーム	4	3.7%	2	2.4%
グループホーム	1	0.9%	2	2.4%
その他	18	16.8%	5	6.0%
合計	107	100.0%	83	100.0%
介護者数(人)	76		39	

(5) 介護経験を経て、自分におきた変化

表3-7は介護経験者と現在継続中の人に、介護経験を通して自分におきた変化をきいている。

① 要介護者との関係の変化

介護を継続中の人は、要介護者との関係を「変わらないと思う」人が51.3%だ

が、既に介護を終えている経験者では、38.2%になる。「良好になった」が10.3%から21.1%に増加し、「悪化した」は、10.3%から5.3%に低下した。

② 要介護者に対するネガティブな気持

「時々ネガティブに感じる」人の割合が、過去の介護者に比べ、現在では14.8ポイント高い。介護者1人が受け持つ要介護者が増え、負担が増していることなども考えられる。

③ 介護経験の意味

介護中は、64.1%の人が、「プラス」及び「よい経験」としてとらえ、30.8%の人が「どちらともいえない」としている。しかし過去の経験者では、「プラス」および「よい経験」と考える人は81.6%で、「どちらともいえない」は、30.8%から13.2%に低下する。

介護は大変であるが、後になるとやりがいがあると思う人が多い。

表 3-7 介護経験によって自分におきた変化

① 要介護者との関係の変化

	介護者数		良好になった		変わらず		悪化した		何とも 言えない		その他		無回答	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
過去に介護	76	16	21.1	29	38.2	4	5.3	23	30.3	1	1.3	3	3.9	
現在継続	39	4	10.3	20	51.3	4	10.3	11	28.2	0	0	0	0	

② 要介護者に対するネガティブな気持

	介護者 数	いつも		ときどき		たまに		全くない		その他		無回答	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
過去に介護	76	4	5.3	16	21.1	33	43.4	17	22.4	0	0	6	7.9
現在継続	39	2	5.1	14	35.9	16	41.0	4	10.3	0	5.1	1	2.6

③ 介護経験の意味

	介護者 数	プラス		プラスでは ないが よい経験		マイナス		どちらとも いえない		無回答	
	人	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
過去に介護	76	27	35.5	35	46.1	1	1.3	10	13.2	3	3.9
現在継続	39	8	20.5	17	43.6	1	2.6	12	30.8	1	2.6

(6) 介護に関する自由記入

40の自由記入を分類すると、①自分が寝たきりや、認知症になった時の不安
②国の少子高齢化社会対策の遅れや介護保険への疑問 ③介護者と家族の関係
④介護と仕事の両立 ⑤介護を仕事とする人の意見 ⑤介護に直面して考えたこと
などとなる。そのうち、7つを紹介する。

- ・医療の発達により、寝たきりの高齢者が生かされている現実がある。人間らしい生活ができてこそその人生です。自分の意思がどこまで反映されるか心配。
- ・高齢化社会・少子化社会に向かうにもかかわらず、福祉の遅れには憤りを感じます。実に周りの多くの知人が苦しんでおります。地域の助け合いが大切かと思う。
- ・医師の判断は大切なアドバイスと思うが、介護される者の気持ちを一番に優先したいと考えている。
- ・配偶者の親の場合、主人の姉、妹が近くに住んでいるといろいろ口を出される。心の中で、(私にだって親がいるのに・・・)と思う。
- ・仕事と介護の両立は、時間的、心理的、身体的に負担が大きい。時間的余裕が欲しかった。時間的余裕は、精神的余裕をもたらす。社会制度の活用方法を知る方法(経済的、施設利用など)がもっと分りやすく豊富になって欲しい。
- ・現在介護にかかわる仕事に就いていますが、家族だけで介護することの大変さは常々感じます。社会資源を利用していくのが、よいと思う。
- ・今でもふり返って思うことは、どんな状態でも、1分でも1秒でも長生きして欲しかった。苦勞して育ててくれた親に対し、自分の介護など、親が自分にしてくれた何十分、何百分の一にすぎないと思う。親を含め社会(人生)の先輩に対し、感謝の気持ちを持って、社会全体がお年寄りを支えることは、絶対に必要だと思う。誰かがされる側にいるのだから。そういう社会を作っていけたらと思う。

まとめ

今年は、戦後60年を迎える節目の年である。新しい世紀に入り、くらしは大きな変化をとげた。情報化、グローバル化が進み、海外で活躍する卒業生も増えている。個人の尊重と生活の社会化が進んだとはいえ、まだ様々な問題がある。

「1. 地域とのかかわり」では、地域の人間関係を、①回生別 ②家族構成別 ③居住地域別 ④就業形態別 ⑤末子年齢別に考察した。その結果、子どもの有無や子どもの年齢が大きな影響を与えることが分った。また、再就職者の活動が伸びている。しかし卒業生のライフスタイルも徐々に変化してきている。東京

のような大都市で一人で暮らしている人は、地域とのかかわりが非常に少ない。

生協、PTA、ボランティア活動、市民活動、その他の地域活動の参加者を20、30、40周年で比較すると、30周年に比べて、40周年では、生協は大幅に増加したものの、PTA活動はやや低下している。

生協活動が増加した理由としては、卒業生の年齢が上がったこと、食の安全や環境問題に配慮するようになったこと、生協の販売システムなどが考えられる。

またPTAの参加者がやや減ったことには、未婚率の上昇や子ども数の減少、仕事に就いている母親の増加の影響などが考えられる。

ボランティア活動や市民活動の参加割合は減少しておらず、従来のもものでは括れないその他の割合が伸びてきており、卒業生の地域活動のあり方も多様化してきている。地域活動は、数的に増加傾向にあるといえよう。

「2. 趣味や楽しみ」では、卒業生の趣味数は、平均1人3.5で、豊かで多様化している。この活力を推し進めて、ゆとりのある社会を作り、地域活動にも還元していけたらと思う。なお、既婚の就業継続者の趣味や楽しみは、その他の人と比較して観光・娯楽的なものが少ない傾向にある。

「3. 老後について」の中、老後の過ごし方では、(1)回生が上になるほど一人で在宅の生活を希望する人が増える傾向にある。また、希望する老後の生活は、現在の家族構成の違いよりも、個人の好みや状況によることが分った。趣味や友人との交流の充実、旅行をたくさんするなどあげた人が多い。(2)老後の不安に関するアンケートの回答は、病気、年金、社会的な介護サービスの質と量、孤独の順で高かった。年金に関しては、27～31回生（33～29歳）が79.2%と、最も高く不安を感じている。年金・介護・医療など公的な施策の充実は不可欠である。

介護では、(1)自宅で社会資源を利用しながらの暮らしを望んでいる人が多い。また有料老人ホームを希望する人が多い。(2)自分の親の介護と配偶者の親の介護を比較してみると、自分の親の時は自らが身近で在宅介護をする傾向がみられる。伝統的な嫁が介護をするという考えは徐々に薄れつつあるといえよう。(3)また、現在の介護の対象者としては、双方の母親の割合が高い。(4)利用したサービスでは30周年と比較して外部化が進み、介護サービスの利用者が増加している。(5)要介護者との関係の変化では、介護を継続している人に比べ、経験者で

は、関係が良好になる割合が高い。また現在は過去に比べ、介護者1人が受け持つ要介護者が増えており、負担が増加しているが、多くの人が、介護経験を「プラスまたはとてもよい経験」と考えている。

家族や子どもとの関係も大切にしながら、友人や趣味や地域での活動に目をむけ、自分らしいライフスタイルを持ちつつある、積極的な高齢期の動きが感じ取られた。また介護の大変さは、たくさんの自由記入に読み取れた。支えあいが大切になってくる。

卒業生のくらしには、家事や子育て、衣食住なども含まれるが、それらについては、報告書「家政経済学科 40周年記念 卒業生の仕事とくらし」の中で述べさせていただきます。

ご回答を寄せていただいた卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。

別表1-1 回生別 地域活動

回生	(人)	あいさつ	幼なじみがそば	危険知らせあい	困ったこと相談	子どもを通じた友人がいる	町内会役員	子育てサークル	PTA活動	生協加入
1	15	14	1	4	4	5	2	1	1	10
2	16	15		7	5	6	1		2	4
3	17	17	1	8	4	9	4	1	1	7
4	10	10		3	3	5	1			4
5	13	13	2	4	3	7	1			8
6	9	7	1	3	3	5	1	1	1	5
7	6	6				3				3
8	18	15	2	9	6	8	2		2	11
9	19	19	1	5	7	9	2		1	10
10	13	10	1	4	1	5	3	1		8
11	12	11	1	4	5	10	2	1	5	6
12	24	24	1	12	8	14	4	2	4	11
13	17	17	1	7	8	13	1		5	7
14	19	18		2	3	13	4	1	4	10
15	14	12	1	3	4	9	2		3	7
16	14	14	1	7	3	7	2	1	4	7
17	12	11	3	6	5	11	4	1	6	7
18	17	16	1	6	3	9	1		6	9
19	18	17	1	8	8	10	2	1	5	8
20	6	6	2			1				2
21	8	7	1		1	4	1	2	1	2
22	10	9		2	2	7	1		3	7
23	8	8	1	4	2	3		1	1	2
24	11	11	2	5	2	6	1	2	2	4
25	11	11	1	2	2	4			1	3
26	19	17	1	3	2	6	1	3	2	5
27	15	14	2	1	1	4				4
28	12	11	1	2	1	4	1	2		5
29	21	19	1	2	2	4		1		3
30	7	4	1			1	1			1
31	17	12	1	1	1					2
32	20	15	1	1		1				1
33	11	10		2	1					2
34	14	11	4	1	1					1
35	16	13	2	2	2	1		1		4
36	11	8								2
37	7	4	1	1						1
無回答	7	7		1	1	2				1
合計	514	463	41	132	104	206	45	23	60	194

別表1-2 回生別 地域活動

		民生委 員・児童 委員	保護司	環境保 護活動	ボラン ティア活 動	NPO活動	生協共 同購入	生協個 別宅配	生協店 舗利用	生協役 員
回生	(人)									
1	15			1	3		3	4	5	
2	16				3	1	2		4	
3	17				3	2	1	3	3	
4	10						2		2	
5	13				1		2	2	4	
6	9			1		1	2	3		
7	6			1			1	1	1	
8	18	1			2		4	3	4	
9	19	1		1	3	1	4	2	6	
10	13				1		1	3	5	
11	12	1			2	3	2	1	3	
12	24	1			2		5	4	4	
13	17			2	4		4	2	4	
14	19				2		6	2	2	1
15	14				1		1	4	3	
16	14	1			1		3	3	2	
17	12				1		4	2	2	
18	17				2	1	2	2	6	
19	18	1			1		2	4	2	
20	6							2	1	
21	8							2	1	
22	10				1		1	4	3	
23	8						3		1	1
24	11						3	2	1	
25	11	1					3	1		
26	19						3	3		
27	15						1	2	2	
28	12					1	1	4	1	
29	21						1	3	1	1
30	7						1			
31	17						1		2	
32	20				1	1			2	
33	11				1		1		1	
34	14				1				1	
35	16							3	1	
36	11							1	1	
37	7						1			
無回答	7									
合計	514	7		6	36	11	71	72	81	3

別表2-1 回生別 趣味や楽しみ

		旅行	語学	テニス	水泳	ゴルフ	料理	茶道	華道	ショット ピング	食べ歩 き
回生	(人)										
1	15	9	2	1	2	2	4	2		4	4
2	16	9	2	1	1		1			7	4
3	17	14	3		3	2	3	2	5	6	8
4	10	8	1		2	1	2			3	3
5	13	8	4	1	2		2	2	2	2	3
6	9	5	1	1	3		1			3	1
7	6	2	2	1	1	1	1	1		1	3
8	18	9	2	5	1	2		3	1	6	7
9	19	10	5	2	1		4		1	1	3
10	13	5	1	1	1		6	2		2	2
11	12	3	3		2		2	2	3	2	2
12	24	9	1	4	2	2	3		2	6	8
13	17	5	3	5	2		3		1	4	1
14	19	3	3		3		2		2	1	7
15	14	4	2	2	2		3			3	4
16	14	2		2	1	2	4			3	3
17	12	7	2	2	2		1			3	4
18	17	9	3	2		1	3	3		5	7
19	18	9	2	2	1	1	3	1	3	7	6
20	6	3	2	1	1		1	1		2	1
21	8	6		1		2	1	2		3	2
22	10	2	1		1		2		1	4	2
23	8	3	2	2	1		2	1	1	4	3
24	11	3		2		2	2	2		2	2
25	11	5	1	2	1	1	4	2	2	3	3
26	19	14	2	1	3	2	5	2	1	7	5
27	15	10	2	2	2	1	4	1		5	6
28	12	7	1		2	1	5	1	1	2	2
29	21	15	3	1	2	2	2	2	3	7	9
30	7	5	1	2	2	1	3		1	3	1
31	17	13	1	2		3	1	1	1	9	5
32	20	8	4	3	1	1	6	2		7	5
33	11	9		1	2	1	3	1		6	4
34	14	9	2	6	5	2	5			6	4
35	16	9	1	1	1	1	3	1		8	7
36	11	6			1	1	3	1	1	8	3
37	7	5	1	1	2	1	3			6	1
無回答	7	4	1				2			2	1
合計	514	266	67	60	59	36	105	38	32	163	146

別表 2-2 回生別 趣味や楽しみ

		ハイキン グ	街歩き	ガーデ ニング	映画・演 劇鑑賞	書道	陶芸	音楽鑑 賞	楽器の 演奏	ペット	その他
回生	(人)										
1	15	3	4	4	5			2	1	1	6
2	16	1	5	4	5	1		5		1	8
3	17	5	3	5	7	1	1	8		2	2
4	10	1	1	2	2	1		2	2	1	7
5	13		3	4	5	3		3	1	4	7
6	9	2	2	2	1			3	1	2	1
7	6			1	1	2		3	1	3	
8	18	1	1	5	5	1		3	6	6	6
9	19	1	1	6	5	2	1	2	3	6	9
10	13	1	1	3	5	1		5	1	6	7
11	12	3	2	2	4			4		5	5
12	24	4	5	4	10	1		7	2	6	7
13	17		2	1	6			7	3	6	6
14	19		2	5	7	2		5	3	2	9
15	14		2		6	2	1	3	1		1
16	14		2	2	2	2		2	4		5
17	12	1	2	1	2			4	3		2
18	17	2	2	3	6			1	1	1	2
19	18		2	1	3	2		1	5	2	2
20	6		1	1	2	1		2			1
21	8			1	3			1	1	2	3
22	10		1		3			2	3	1	1
23	8		1	1	2		1	2	1	1	5
24	11			3	2	1		3	1	1	2
25	11	1	3	1	3	1					7
26	19		5	4	5			3	1	3	3
27	15	1	3	1	7			3		3	3
28	12	1	3	2	1			3	2	1	3
29	21		3	2	7	1		7	2	3	9
30	7				1			2		1	2
31	17		5	1	6	1	1	4	1		4
32	20	1	3		7	1	1	4	4		4
33	11		3	1	1	1		3			4
34	14	1	6		4			3	1	5	
35	16		10		11			7	4	2	4
36	11	1	3		7	1		6	1	3	4
37	7				2			4	1	1	2
無回答	7	1	2		1			2	3		1
合計	514	32	94	73	162	29	6	131	64	81	154

家政経済学論叢第41号

2005年5月20日発行

編集発行人 時子山ひろみ・日水俊夫・秋元健治

発行所 日本女子大学家政経済学会

東京都文京区目白台2-8-1

電話 03-5981-3502 (直通)

FAX 03-5981-3517 (学科共通)

印刷所 コーハン株式会社

東京都文京区春日2-18-9

電話 03-3813-4481
